

令和7年度 新型インフルエンザ等対応訓練事例集

【情報伝達訓練、患者移送の実動訓練等】

事例 1	豊島区・新宿区	(感染症指定医療機関、保健所)	※ブロック訓練
事例 2	江東区	(感染症指定医療機関、民間救急、保健所)	※ブロック訓練
事例 3	文京区	(感染症指定医療機関、民間救急、保健所)	※ブロック訓練
事例 4	大田区	(感染症指定医療機関、民間救急、保健所)	※ブロック訓練

事例-1 令和7年度新型インフルエンザ患者発生時対応訓練(豊島区・新宿区)【ブロック訓練】

訓練概要

1 訓練の日時・場所・実施機関

(1) 日時

令和7年11月11日(火曜日)午後2時15分から午後3時15分まで

(2) 場所

感染症指定医療機関(国立国際医療センター)

(3) 実施機関

感染症指定医療機関(国立国際医療センター)、豊島区池袋保健所、新宿区保健所、

(公財)東京都防災救急協会、都

※ 東京都防災救急協会はリモートで参加

2 訓練の目的

新型インフルエンザ都内発生早期における、保健所や医療機関等の役割や動きについて演習を行い、関係機関同士の業務調整フロー及び調整内容を明確にし、新型インフルエンザ等発生時の対応力を向上させる。

3 患者の概要

患者X 43歳男性、会社員で豊島区在住。単身世帯。

新型インフルエンザ(インフルエンザA/H5Nx)の流行国から帰国後に発熱及び咳嗽があり、豊島区内のC病院を受診。

C病院の医師は、渡航歴・接触歴から新型インフルエンザ(インフルエンザA/H5Nx)を疑い、現在患者は病院内の個室に待機させるとともに管轄保健所に連絡。

(その後情報伝達訓練の中で、入院調整の結果、国立国際医療センターへ入院となる)

4 訓練の流れ

【情報伝達訓練】(WEB・対面併用形式)

国立国際医療センターの会議室に、病院、保健所及び都職員が集合し、WEBのオンライン会議を利用して、机上訓練を実施。

東京都防災救急協会は、東京民間救急コールセンターとして、WEBでのみ参加。

豊島区のC病院が豊島区池袋保健所に第一報の電話を入れたところから、関係者への連絡、入院調整、患者移送の手配、患者への説明、関係自治体への連絡等の対応について実演。

訓練の振り返り

○今回の訓練を通じて、患者発生時に所管の保健所が担う業務の多さや、その対応の困難さを改めて実感できた。

○患者発生初期における情報共有や連絡調整の重要性を、改めて確認することができた。

○関係機関がそれぞれの役割を意識しながら対応を進めていくことの難しさや、連絡のタイミング、手段、内容を整理しておくことが重要である。

○新型インフルエンザ等感染症は、いつ発生するか予測が難しい一方で、発生時には迅速かつ的確な対応が求められる。こうした訓練を通じて、関係機関同士の連携を平時から確認し、顔の見える関係を築いておくことが、実際の対応力の向上につながるものとする。

○症例定義によって、疑似症としての対応が異なる場合があることを、常に念頭に置いておく必要がある。

事例-2 令和7年度新型インフルエンザ患者発生時対応訓練(江東区)【ブロック訓練】

訓練概要

1 訓練の日時・場所・実施機関

- (1) 日時
令和7年12月23日(火曜日)午後1時00分から午後4時00分まで
- (2) 場所
感染症指定医療機関(都立墨東病院)
- (3) 実施機関
感染症指定医療機関(都立墨東病院)、江東区保健所、墨田区保健所、江戸川保健所、(公財)東京防災救急協会、民間救急事業者、都

2 訓練の目的

新型インフルエンザ都内発生早期における、保健所や医療機関等の役割や動きについて演習を行い、関係機関同士の業務調整フロー及び調整内容を明確にし、新型インフルエンザ等発生時の対応力を向上させる。

3 患者等の概要

- 患者X 68歳男性、福井県福井市在住 同居家族妻
- 12月22日、海外から帰国。19時頃から発熱を自覚し、咳、鼻汁があったため、江東区内のAクリニック(夜間診療所)を20時40分に受診。
- 夜間(21時15分)、Aクリニックは、新型インフルエンザの疑似症の発生届の提出のために東京都保健医療情報センター(通称:ひまわり)に、江東区保健所と連絡を取りたい旨、電話。その後、ひまわりから連絡を受けた江東区職員は、Aクリニックに架電(→情報伝達訓練スタート)。

4 訓練の流れ

【情報伝達訓練】(対面方式)

- 都立墨東病院の講堂に、病院、保健所及び都職員等が集合し、WEBのオンライン会議を利用して、患者覚知から病院受入れ調整までを実施。夜間の入院調整の流れを確認。

【実動訓練】

- 民間救急車から降車した患者の受入れ、引継ぎ、バイタルサイン測定、PPE脱衣等の訓練を実施

訓練実施風景



情報伝達訓練風景①



情報伝達訓練風景②



患者搬送訓練風景①



感染症病床の様子



PPEの脱衣



振り返り

訓練の振り返り

【情報伝達訓練】

- 夜間帯を想定した訓練により、搬送手段・入院調整が課題であると感じた。
- 勤務時間外のメール連絡の実効性に課題があり、確実な伝達手段の検討が必要である。
- 夜間・休日における都・保健所間の情報共有方法について、共通の課題認識が得られた。
- 国内一例目を想定した場合のプレス対応を含む初動対応について、整理の必要性が確認された。
- 現在、顔の見える環境でコミュニケーションが取れている。今後も、訓練や他の機会を通じて関係を構築することが重要

【実動訓練】

- 搬送時の患者情報の申し送り方法(口頭・メール等)の整理が必要
- 電子カルテに取り込める文書による事前の情報共有の有効性が確認された。
- PPE着用下では意思疎通が困難となるため、コミュニケーション方法の工夫が必要である。
- 搬送業者のPPEの脱衣については、病院が補助も可能。PPEの着脱訓練の必要性を認識

事例-3 令和7年度新型インフルエンザ患者発生時対応訓練(文京区)【ブロック訓練】

訓練概要

1 訓練の日時・場所・実施機関

- (1) 日時
令和8年1月22日(木曜日)午後1時00分から午後4時00分まで
- (2) 場所
感染症指定医療機関(都立駒込病院)
- (3) 実施機関
感染症指定医療機関(都立駒込病院)、文京保健所、民間救急事業者、都

2 訓練の目的

新型インフルエンザの患者受け入れ訓練を院内外が多職種と協同して行うことで、それぞれの役割を明確にする

3 患者等の概要

- 患者X 48歳男性、会社員で文京区在住。妻と二人暮らし
- 海外から帰国後に発熱及び咳嗽があり、文京区内のA病院を受診。
A病院医師は、渡航歴・接触歴から新型インフルエンザ(インフルエンザA/H5Nx)を疑い、患者を病院内の個室に待機させた。体温は38.0℃台が続き、咳嗽・鼻汁、倦怠感の症状あり。

4 訓練の流れ

【実動訓練】

- 参加者及び見学者は、都立駒込病院の講堂に集合し、訓練の概要説明と最終確認を行う。
その後、患者役は、一類感染症外来の入口からエレベーターにて2階の感染症用の病室へ搬送。
病院医師は、保健所医師から引継ぎを受ける。その後、心電図モニター装着、バイタルサイン測定、採血、咽頭ぬぐい検査のための検体を採取。保健所職員に検体を渡し、検体搬送。
胸部レントゲン撮影後、保健所職員と患者との間で、タブレットを介したリモート疫学調査を実施。
看護師退出、PPEの脱衣。
- 訓練終了後に意見交換を実施

訓練実施風景



民間救急自動車から降車



病棟にて患者搬送



1Fモニター(見学者用)



検体搬送準備



リモート疫学調査



意見交換訓(訓練終了後)

訓練の振り返り

- 患者対応や一連の流れを実地で確認でき、現場を想定した訓練の有効性を再認識した。
- PPEの着脱や検査時対応について、慣れていない動作やN95マスクで声が出にくい点などの課題があった。訓練などにより、定期的な動作確認が必要。
- PPE着脱時は安全なスペース確保と周囲の声掛け、複数人での確認が重要
- マニュアル化しにくい採血などの細かな動作は繰り返し訓練し、第三者が客観的に確認することが有効
- リモート疫学調査は、問題なく行われた。訓練に取り入れることで、声掛けや反応を学べる機会となった。
- 保健所・医療機関等の連携強化と役割への理解が有事対応力の向上につながる事が改めて認識された。
- ストレッチャーに乗ると周囲が見えず不安になる。周囲の声掛けが必要。透明なアイソレーターを使用するなどの工夫も考えられるとの提案があった。

事例-4 令和7年度新型インフルエンザ患者発生時対応訓練(大田区)【ブロック訓練】

訓練概要

1 訓練の日時・場所・実施機関

- (1) 日時
令和8年2月17日(火曜日)午後2時00分から午後4時00分まで
- (2) 場所
感染症指定医療機関(都立荏原病院)
- (3) 実施機関
感染症指定医療機関(都立荏原病院・都立駒込病院)、大田区保健所、(公財)東京防災救急協会、民間救急事業者、都

2 訓練の目的

新型インフルエンザ都内発生早期における、保健所や医療機関等の役割や動きについて演習を行い、関係機関同士の業務調整フロー及び調整内容を明確にし、新型インフルエンザ等発生時の対応力を向上させる。

3 患者等の概要

- 患者X 24歳女性、会社員で大田区在住。両親と3人暮らし。
- 海外から帰国後に発熱及び咳嗽があり、大田区内の病院を受診。
B病院でインフルエンザの抗原検査を行ったところ、インフルエンザA陽性、B陰性であったため、渡航歴、接触歴から新型インフルエンザを疑い、B病院内の個室に待機している。

4 訓練の流れ

- 参加者及び見学者は、都立荏原病院の会議室に集合し、訓練の概要説明を受ける。
情報伝達訓練を行った後、実動訓練を実施

【情報伝達訓練】

- 保健所からB病院への聞き取り、保健所から防疫課等への連絡、疑似症発生届のB病院への提出依頼、入院調整、患者搬送の手配、検体搬送に至るまでの一連の情報伝達の訓練及び確認を実施

【実動訓練】

- 患者の受入れ、PPEの脱衣の実施
- 病室から院内の細菌検査室に検体搬送、検査科から保健所職員へ検体の受け渡しを行う。

訓練実施風景



情報伝達訓練



民間救急自動車から降車



病棟にて患者搬送



PPEの脱衣



細菌検査室(検体搬送準備)



意見交換(訓練終了後)

訓練の振り返り

- 患者対応から入院調整、搬送、検体対応までの一連の流れを実地で確認でき、実際の発生場面を想定した訓練の有効性を再認識した
- 受入側として必要な患者情報や聞き取るべき内容について、事前に整理・共有しておくことの重要性が確認された。
- 民間救急による搬送では、患者観察やコミュニケーションに制約があり、近隣医療機関への迅速な搬送や搬送方法の工夫が必要である。
- 検体搬送や検査室までの動線が分かりにくい場合があり、検査室の場所や動線について事前に確認する必要がある。
- 訓練を通じて、保健所・医療機関・関係機関間の役割や連携を相互に確認できた。
- 関係機関や多職種が連携して、毎年度お手本となるケースを積み重ね、顔の見える関係を構築することが大事。
- 職員の入れ替わりが進む中、過去の感染症対応の経験を風化させないためにも、基本的な対応を繰り返し訓練することが重要